

パレスチナ赤新月社医療支援事業（レバノン）事業管理要員の活動報告書

報告者：国際医療救援部 国際救援課 片山 珠

派遣期間：2022年12月1日～2023年5月31日

派遣地：レバノン共和国

1 背景

1948年のイスラエル建国を機に、そこで暮らしていたパレスチナ人が難民となりました。レバノンにも多くのパレスチナ難民が逃れましたが、それから75年経った今も帰還の目途はたっておらず、今や4世代にわたって約590万人の方々もが難民としての生活を続けていると言われていています（UNRWA2021）。

日本赤十字社（以下、日赤）は、レバノンで暮らすパレスチナ難民への医療支援を行うため、2018年からパレスチナ赤新月社レバノン支部（以下、PRCS/L）が運営する病院の医療支援事業を開始しました。私は、2022年12月から半年間、この事業の事業管理要員として現地で活動しました。



▲パレスチナ難民キャンプの様子

2 事業概要



▲PRCS/Lの5病院を示した地図

PRCS/Lは、レバノン国内のパレスチナ難民キャンプ周辺で5つの病院を運営しており、日赤はこれらの病院を対象に医療技術支援を行う3カ年事業（第一期）を2018年4月から開始しました。一定期間、一つの病院に日赤の医療チームが入って医療の質向上に向けた支援を行い、その活動地を順に移行していく、という形です。第一期事業では5病院のうち3病院で活動をしていましたが、新型コロナウイルス感

染症の世界的流行の影響により現地活動を途中で中断せざるを得なくなりました。その後はオンラインによるリモート支援に切り替えて何とか継続してきましたが、2021年に行ったアセスメント結果から引き続き支援ニーズが高かった現場の状況を受けて、要員の現地派遣再開と第二期事業の開始が決定されました。2022年4月から現在まで、レバノン北部にあるサファド病院にて活動を行っています。私は、サファド病院での活動の折り返しである中盤から後半にかけての期間に派遣されました。

<第二期事業の事業計画>

事業期間	2022年4月～2025年3月（3年間）
------	----------------------

主な支援対象	第一期で未介入だった2病院（サファド病院、ナスラ病院）と3か月のみの活動となっていたタルエルザータル病院
事業目標	<p><上位目標></p> <p>レバノンのパレスチナ難民およびその他の脆弱な地域住民に対する医療サービスの質が向上すること</p> <p><事業目標></p> <p>2025年までにパ赤レバノン支部の病院体制を改善し、病院スタッフが安全・安心に医療サービスを提供でき、その質が向上かつ安定的に維持される</p>

3 活動内容

事前のアセスメント結果を元に、5つの柱（右図）に沿った支援計画を立てて活動を行っています。

例えば、医療の質の標準化としては、入院から退院までの看護の質の統一化を目指してクリニカルパスを導入したり、手術時の医療事故を防ぐための WHO 手術安全チェックリストを導入したり、救急外来で新しい ER カルテ様式を用いてトリアージを導入してきました。感染対応では、病院の感染管理スタッフと共に院内ラウンドをし、医療廃棄物の処理や医療品の管理、ラウンドやチェックリストの見直し等を行っています。多数傷病者受け入れ体制の構築では、災害対応に必要な知識と技術についてトレーニングを行い、2023年3月にはその集大成として大規模な災害訓練を実施しました。また、

医師部門としては日赤が寄贈したポータブルエコーについて診断トレーニングを行ったり、レントゲン読影の技術支援を行ったりしているほか、看護部門ではフィジカルアセスメントの強化や看護記録の改善などにも取り組んでいます。

日赤の活動は技術支援や人材育成に力を入れており、現地の病院に派遣した医療チームが毎日現場のスタッフと共に働き、その中で技術や知識を教え、指導していくというのが特徴の一つです。活動開始当初は、よそから来た支援団体という感じで、日赤が何をしに来たのかも知らないような状態でしたが、日々の活動を通して信頼関係を構築し、今では現地の病院スタッフと日赤チームの間には仲間としての強い絆が芽生えています。



4 事業管理要員の役割

事業管理要員は、事業全体の進捗を管理しながら医療チームが現場でスムーズに活動できるようにサポートすると共に、決まった期間内で目標の成果を上げられるよう医療行為以外のあらゆる面にかかる調整を行います。

私は首都のベイルートの宿舎に住み、普段は車で15分ほどのところにある国際赤十字・

赤新月社連盟（以下 IFRC）北アフリカ・中東地域事務所の中にある日赤オフィスで勤務しながら、定期的に医療チームが活動するサファド病院を訪問していました（車で片道 1 時間半～2 時間）。また、ロジスティクス回りの調整をしたり、カウンターパートとの窓口として関係機関と調整をしたり、広報活動を行ったり、各活動に必要な事務書類の作成や手続きを行うことなどが主な業務でした。

日赤はレバノン国内で法人格を持っていないため、事業に必要な手続きの多くを IFRC を介して行う必要があります。例えば日赤から派遣する要員の出入国にかかる諸手続きや宿舍の契約、必要物品の購入や整備などです。また、レバノン国内で行う日赤の活動は、全て連盟による安全管理管轄下で行うことになっています。したがって、日赤チームの誰がどこに何で行くのか、日々の要員の動きを連盟に申請し、承諾を得てからでないと活動をする事ができません。難民キャンプ内は普段は平穏ですが、セキュリティレベルとしては決して低くはなく、日々の移動や安全管理に関しては常に緊張感を持った対応が求められました。



▲IFRC オフィスの外観

ちなみにこのオフィスには、連盟スタッフの部署のほかに、他国の姉妹社オフィスもいくつかあり、昼休みに皆でごはんを食べたりするなど和気あいあいとした環境でした。普段は各自の仕事をしていますが、一度大きな災害が発生すると一致団結して迅速に対応する、プロフェッショナルの集まりであることを肌で感じました。

5 事業管理要員としての活動紹介

特に、サファド病院のなかで携わった活動をいくつか紹介します。

（1）活動進捗管理

毎月月末に日赤チーム全員で進捗確認を行い、病院幹部との会議で成果報告や課題共有、今後の対応の検討を行いました。最初のほうは日赤が主導権をもって進めなければなりませんでした。後半になるにつれて、撤退に向けてハンドオーバーの土台を築いていく必要があったため、いかにスタッフの主体性を引き出しながら活動を移譲していくかを日々チームで考えながら試行錯誤を重ねました。モニタリングシートについては日赤側でまとめた結果を提示していたところから共に評価していく形に移行したり、幹部会議については日赤側のプレゼン中心だったところから自分たちで解決策を検討する機会を増やしていったりと、撤退に向けての意識を高める働きかけを進めていきました。私の離任直前の幹部会議では、より活発な議論が見られるようになり、幹部メンバーからの「撤退後も日赤が行ってきた活動を必ず継続して行っていく」という力強い言葉には嬉しさと頼もしさを感じました。



▲幹部会議の様子

(2) モニタリング体制の構築

事務職が院内で貢献できる分野として、撤退後も継続できるようなモニタリングの流れやそのためのデータ入力シートの作成にあたりました。実際にモニタリングを行う病院スタッフと話し合い、運用の流れを考えながら、達成率や実施率の自動計算・自動グラフ化、改善点に意識が向くような表の自動色付けなどを入れつつ、日々の入力結果が一目で見えるようにした表を完成しました。派遣期間中、安全上の問題で日赤チームがキャンプ内に入れなかった時期もあったのですが、その間も病院スタッフ自らモニタリングを継続して取り組むことができたのはとても嬉しかったです。モニタリング結果を活用して、さらに現場の改善が進んでいってほしいと思います。



▲手術室看護師長との打合せ

2023 March	1	2	3	4	5	6
Operation	Inguinal hernia	Lipoma				
Case 1	<input checked="" type="checkbox"/>	✓	✓			
Comments						
Operation	Abdominal hernia	Orchidopexy				
Case 2	<input checked="" type="checkbox"/>	✓	×			
Comments		red marking				
Operation						
Case 3	<input checked="" type="checkbox"/>					
Comments						
Operation						
Case 4	<input checked="" type="checkbox"/>					
Comments						
Total Cases	2	2	0	0	0	0
Number of ✓	2	1	0	0	0	0
Number of ×	0	1	0	0	0	0
% of Checked cases	100%	50%	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!

▲WHO チェックリストのモニタリングシート

(3) 多数傷病者受け入れ (MCI) 体制構築

MCI (Mass Casualty Incident) 状況下の病院では、医療職だけでなく、事務職員の動きも非常に重要になってきます。この病院は以前も大規模な訓練を行った経験がありましたが、その時の事務職員は自分たちの役割がわからず動けなかったとのことで、今回事務職員へのフォローアップを行うことになりました。主には、情報管理や物品・施設設備の管理、本部では何の情報が必要か、誰がどう収集するか、クロノロジーの役割と書き方、クラウドコントロールなどの安全管理について、日本での一例を紹介しつつ、集まった事務職員に考えてもらいました。訓練当日は、搬送調整までは行えませんでした。最低限の患者情報の記録やクロノロジーは自分たちで動いて何とか形として残すことができました。過去の訓練では情報を記録すること自体行われていなかったため、サファド事務職員の一つの成果として自信を持って対応してもらいつつ、さらに備えを強化してほしいです。

また、訓練当日は、近隣住人が模擬患者や傷メイクなどを行い、訓練に協力してくれました。訓練終了後には、病院スタッフへの平素の備えの啓蒙と、協力してくれたコミュニティへの感謝及びさらなる協働の促進を目的として、MCI ポスターを作成したところ、院内用のポスターを渡した翌日にはさっそく職員・患者の目につく各階に掲示され、職員が足を止めてみている様子を目にすることができました。実際に大きな災害や事件が発生しないよう願いながらも、いざという時には地域住民の命を守る砦としてこの経験が生かされるよ

う、また継続的に訓練を実施して備えを強化していけるよう、願っています。



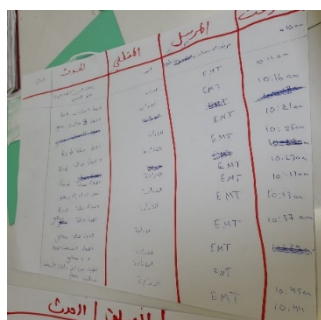
▲MCI 訓練に向けた事務向けフォローアップ



▲訓練当日の被災地エリアの様子



▲訓練中の事務スタッフ



▲訓練当日のクロノロジー



▲院内に掲示された MCI ポスター

6 派遣を通して

今回が私にとって初めての海外派遣でしたが、たくさんの人に恵まれ、事業全体の調整を担い活動を下から支える役割や、医療チームの一員として病院スタッフに対して直接的な支援を行う役割など様々な角度から携わらせてもらいました。中長期支援事業は期間が定められていていつかは終わりを迎えますが、病院の運営やそこでの人々の暮らしはその後も続いていきます。サファド病院での活動終了が近づくこの期間に従事したことで、撤退後、現地に何が残るかがいかに重要であるかを身に染みて再認識しました。サファド病院での残り数か月の活動期間、最後まで現地スタッフに寄り添い、彼ら自身が問題意識や向上心を持って取り組んでいけるよう続けてサポートしていきながら、より質の高い医療が現地に根付いていくよう心から願っています。

そして私自身、今回の経験を通して物事を多角的に捉える視点、ミクロ・マクロの両方で見ることができる視点、それらを組み立てて段取りを立てる調整力と推進力を身につける必要性を強く感じました。今後も人道支援活動に貢献していける人材になれるよう、日々の業務や生活を通してこの経験を活かしていきたいと思います。

7 さいごに

この事業では、日本からの派遣要員のほかに、日赤チームの一員として働く現地職員がいます。彼ら自身もパレスチナ難民としてレバノンで生まれ育ちました。いつも明るく、日赤

の事業を献身的に支えてくれる彼らは、普段は難民としての苦悩を吐露することは全くありませんでしたが、ある日の昼休みにこれまで経験した困難を話してくれたことがありました。将来の夢を抱いて大学進学のために勉強し、成績的には問題ない合格点を取れたけれども、パレスチナ難民という理由で奨学金に応募すらできず諦めるしかなかったこと。就職先を探すときに国籍の回答が求められ、パレスチナ難民とわかるとその場で拒否されてしまったこと。優秀で心優しい彼らが、生まれた境遇だけで多くのことを制限されて生きてきたという事実を直接聞き、頭でだけ知っていた「当たり前の権利が認められない」現実が実際にあることを痛切に実感せざるを得ませんでした。



▲日赤チームの集合写真

最後に、私が離任する前にサファド病院の院長にインタビューをした際、日本に向けて伝えてくれたメッセージを記したいと思います。

「遠い国日本から、私たちのことを支援してくれて本当に感謝している。日本から、私たちのことを想ってくれる人がいる、ということが本当に大きい。これからもパレスチナ難民を忘れないでほしい。」



▲サファド病院長の Dr.Ali

日赤の国際活動は皆さまからの温かいご支援に支えられています。皆さまが託して下さった想いを現地の方々に届けていけるよう活動を続けていきますので、今後ともご支援、ご関心をよろしく願いいたします。